【エッセイ部門・優秀賞】

マイヒーロースーツ

慶應義塾湘南藤沢高等部　第１学年　松本　馨

子供のころ、僕は映画やアニメに感化されやすい子だった。スターウォーズを観た次の日にはジェダイとして家中のものを自分のワールドの中で切り倒していたし、のだめカンタービレを観たときはたちまち超人気指揮者まで上り詰めた。これはそんな僕の話である。

４歳のころ、家族でトルコに旅行することがあった。そのころのぼくは絶賛仮面ライダーに大ハマりしていた。ライダーベルトで変身し、悪役を倒す。その光景にはいつも痺れた。自分なりの仮面ライダーを妄想して、父相手に戦いを挑んだこともあった。そんな時、トルコへの飛行機の中で僕はスーパーマンに出会った。その肉体的なボディを強調するピチッと締まった青のスーツ、肩からかけられたヒーローの証のマント。そして胸には大きなＳのマーク。このヒーロースーツに数々の悪役だけでなく、ぼくも身震いした。うわぁかっこいい。かっこいいなんてもんじゃない。ぼくはすっかりスーパーマンにハマってしまった。ああぼくもスーパーマンになって敵を全員やっつけて世界を救いたい！旅行中そんなことばっかり考えていた。そんなブーム真っ最中の時、ぼくは見つけてしまったのだ、路面店の店頭に並ぶ様々なＴシャツの中に青いＴシャツがあるのを。その青いＴシャツの胸には大きなＳのマークがあった。

「あれ買って！！！」

一緒に歩く父の手を握る指先に力を込めながら、またいつもの欲しがり屋さんモードの声で父にお願いしてみる。しかし、当然のように父は首を縦には振らなかった。

「今回はこれしか買わないから！！！」

なんでもかんでもすぐ欲しがるぼくのために、うちでは旅行中 1 個だけ好きなものを買っていいというルールがあった。その１個をこのＴシャツに使うと言ったんだ。しかし、それでも父は首を縦に振らなかった。うーん、こうなったら無言作戦だ！父の大きな手に連れられ店を離れるぼくは作戦決行の意思を固めた。すると効果は意外とすぐ現れた。流石に何も話さないというのはわが子ながらかなり面倒くさかったんだろう、父はその日の夕方にまたぼくを連れて店まで来て、店頭のオジサンにスーパーマンのＴシャツを指さし、

「あれ試着いいですか？」

と聞いた。するとオジサンは高い場所に掲げてあるその Ｔ シャツ、いやヒーロースーツを取って渡してくれた。これでぼくもスーパーマンになれる！一日中溜めていたワクワクを体で表現してしまいたいほど興奮状態にあったぼくはスーツに初めて腕を通した。ずっと日に当たって少し暖かったそのスーツは、子供のぼくにはまだ少し重かった。けどそんなことはどうだっていい。今すぐにでも自分のワールドに入って敵を倒したい！そう思いつつ、外っ面は冷静に、確実に父に買ってもらえるよう、父の目をしっかり見てテレパシーで伝え

た。父は困った顔をしていた。
「本当にこれでいいの？もっと良いのを探したらあるよ？」
父が確認する。
「これが欲しい！」
このTシャツだから欲しい。あの時、自分の目に映った「この」Tシャツが欲しい。
　そこで映像は途切れる。しかしこれは僕の想像で作られたものではなく、確かな記憶である。当時、そのTシャツがどれだけ欲しかったか、今でも鮮やかに覚えている。でも、どうしてもそのあとのTシャツの行方が分からなかった。
　あれから十年以上の歳月がすぎて、僕は中学生になっていた。母がもう着られない子供服をタンスから発掘していると、一枚の青いTシャツが出てきた。胸には大きなSのマーク。
「あ、これスーパーマンのTシャツ」
そう僕が口に出すと、無性に当時のように着たくなって、その T シャツに腕を通した。ジャストサイズだった。4歳のころは感じていた重みはもうなかった。
「なんでこんなジャストフィットなの？」
「え、あんたあの時超ブカブカなのにこのTシャツ買わせたじゃない。」
「え？そうなの？あ…」
なぜこの T シャツについての記憶がそこで途絶えているかやっと理解した。あの時はサイズなんてどうでもよかった。胸に S のマークがあるだけでもうスーパーマンだったんだ。あの重みは T シャツがオーバーサイズだったからだけじゃない、ヒーローとしての責任がその一枚に乗っかっていた。けれど今になってはどの重みももうない。さびしいなぁ。もう僕はジェダイにも、指揮者にも、スーパーマンにもなれない。そんなの前から分かっていた。けど、そのTシャツを着た時ほど、その当たり前すぎる現実がさびしい時はなかった。